



ワクチン待望報道の弊害

高橋 真理子

新しいウイルス感染症が流行すると、ワクチン待望論が広がる。その「世論」をメディアはそのまま報道する。ワクチンにはさまざまな限界があること、副作用というデメリットもあり、メリットと天秤にかけて使うべきものといった「ワクチンの基本」は、待望報道の嵐の中では置き去りにされてしまう。

2009年の新型インフルエンザのときもそうだった。4月に北米で患者が見つかったのが始まりで、日本ではカナダに短期留学していた高校生らの感染が5月にわかり大騒ぎになった。6月には世界保健機関(WHO)が「パンデミック(世界的大流行)」と宣言したが、国内感染者数は12月初めをピークに減っていき、翌年3月に厚生労働省が第一波の終息を宣言した。終わってみれば普通のインフルエンザと大差なかった。

WHOは早々に「ワクチンの2回接種が必要」と表明し、日本政府も国産と輸入を含めて全国民分のワクチン確保に奮闘した。接種は10月からまず医療従事者や救急隊員を対象に始まり、次は妊婦や持病のある人、その次は幼児と小学校低学年と広げていった。「誰でもどうぞ」となったのは翌年1月からだったが、このときには流行も下火になっていて接種希望者は少なく、結局、ワクチンが大量に余った。事情はほかの国々でも同様で、WHOに対し「製薬会社と癒着して大げさに言ったのでは」といった非難も出たのだった。

結果論でいえば、全国民分のワクチンは流行終息に必要ななかった。ワクチンには使用期限があるので次の流行時に回すということはできず、大量のワクチンが無駄になった。

こんな教訓がほんの10年ほど前に得られているのに、また相変わらず無邪気なワクチン待望報道が続いている。「新しいワクチンの開発に全力を尽くす」といえば世間から喝采を浴びるため、政権は折に触れてそんなことを言い、それをメディアが流し、人々はますます期待を高めるという循環構造。新聞の社説などでも「一刻も早いワクチンの開発を」といった主張が繰り返される。

もちろん、新しく良いワクチンが開発されるのは望ましいことだ。開発努力に水を差す必要はない。だが、いま必要なのは「ワクチンなしでできる対策」を真剣に考えることである。期待論の盛り上がりはこれをおろそかにさせる弊害がある。

PCR検査に関する報道にも似た問題を私は感じる。流行が始まった当初、日本ではPCR検査の態勢が不十分で、その拡大強化が求められた。だが、「とにかくどんどんPCR検査を増やすべき」という主張になると、「検査は万能ではない」という「検査の基本」が置き去りにされていると感じずにはいられない。それを説明しようとする、「政権を擁護するのか」という見当はずれの批判が飛んでくる。

PCR検査に関する報道にも似た問題を私は感じる。流行が始まった当初、日本ではPCR検査の態勢が不十分で、その拡大強化が求められた。だが、「とにかくどんどんPCR検査を増やすべき」という主張になると、「検査は万能ではない」という「検査の基本」が置き去りにされていると感じずにはいられない。それを説明しようとする、「政権を擁護するのか」という見当はずれの批判が飛んでくる。

ワクチンにせよ検査にせよ、不完全なのだ。不完全なものを使いこなしていく知恵が人類には求められている。不完全さを理解しようとせず、○か×かの二者択一思考から抜け出せない人の、なんと多いことか。コロナ禍で見せつけられた現実である。

(JASTJ副会長／朝日新聞科学コーディネーター)

CONTENTS

巻頭言	1
特集 コロナの夏	2
例会報告(7月) 新型コロナ、医療現場の最前線から	4
ニュース	5
青野さん記者クラブ賞受賞／科学ジャーナリスト賞2020	

講評／オンラインで科学ジャーナリスト塾開講／サイエンス・ブック・カフェ／井戸端会議／自己紹介	
オピニオン／WEB編集長から	10
事務局だより	12

✦特集 コロナの夏

キンチョウ(緊張)の夏、ニッポンの夏、コロナの夏

梅雨になれば、暑くなれば、という期待もあったが、新型コロナウイルスは夏にも強かった。「自粛」と「Go Toトラベル」のはざまで、多くの人が特別な夏を体験した。「へえー」がたくさん詰まった、会員の夏を紹介する。報道だけでなく、医療にも、政治にも参考になる話がある。

 どちらの気持ちもわかる

両親が長野の実家で二人暮らしをしており、いつ帰省するか、するべきではないのかを考え続けた夏だった。

6月19日に、都道府県をまたぐ移動の自粛が緩和されたため、7月第2週に帰省する計画を立てた。

とはいえ、なるべく濃厚接触は避けたい。実家に泊まることはやめて、念願の軽井沢の老舗ホテルを予約した。これまでそんなことをする「正当な理由」はなかったもので、それはそれで新鮮だった。

しかし、7月に入ると東京の新規感染者数が100人を超え、日ごとに増えていった。

「駐車場に東京ナンバーの車を止めておくと、傷をつけられるという噂を聞いた」「ご近所の目もある」「お盆の帰省でこっちも感染者が増えるんじゃないか、みんな心配している」と、電話の向こうの声は娘の帰省に後ろ向きになった。

子としては、「ご近所の目」を気にする親の気持ちと、お正月以来、会っていない親が元気かどうかを自分の目で確かめたい気持ちが交錯した。世間の人の移動する理由、しない理由のどちらも分かるといったところだ。

迷ったが、結局取りやめた。お盆の帰省も自粛した。両親にZOOMの使い方を覚えてもらいオンラインで集った。やらないよりは良かったが、味気ない「再会」だった。(副会長 瀧澤美奈子)

 何度も帰省することになった夏

7月下旬、秋田の弟から「市役所から連絡があり、父がトラブルを起こしている」と相談の電話がかかってきた。父は福岡県内の小さな田舎町で一人暮らしをしている。母の他界後は実家とは少しずつ疎遠になり、ここ数年は全く帰省していない。しかし、今回は帰省自粛中にもかかわらず急ぎ福岡へ向かった。

市役所では、「最近、金銭感覚、庭木、ごみや服装のことなどでさまざまな問題が起きている。介護申請をして必要な支援を受けてはどうか」と提案された。申請手続きそのものは難しくないのだが、さまざまな問題や障壁にぶつかり一向に話が進まない。最初の障

壁は病院、つまり、かかりつけ医が決まらないことだった。それは父がいくつかの疾患を抱えていて、病気によってかかっている病院が違っているために一本化が必要だったこともあるが、それよりも父本人の受診拒否が大きな足かせになった。

現在はようやく申請は終わったものの、次の問題が発生。一人暮らしはもう難しく、早く高齢者施設を探さなければならない。しかし、新型コロナが落ち着いた状況での施設見学は難航している。8月は4回帰省した。まだまだ帰省は続きそうである。

(理事 早野富美)



久しぶりの福岡県の実家に着くと、庭は手入れされていない木と生え放題の雑草に覆われていた。(撮影 早野富美)

 第39.5回トライアスロン大会

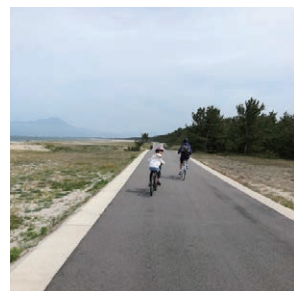
8月31日時点での東京都の新型コロナ感染者は20,817人、鳥取県の感染者は22人。

日々のニュースで東京の感染者数を目にする。人口密度の高さ、満員電車での移動等で、感染対策を万全にしても、どこで感染するか分からない状況にあるのだと、遠く離れた場所から察する。

一方、私の住む鳥取県では、人口密度の低さ、車での移動等である程度、人と人の距離が保てる環境下にあることもあり、幸いにも感染者数は少ない。

そんな鳥取県西部に位置する米子市の皆生温泉は、日本におけるトライアスロン発祥の地。1981年8月に国内初のトライアスロン大会として始まった。毎年、全国から1000人以上のアスリートに加え、約4000人のボランティアが参加し、選手から大きな「勇気」と「感動」をもらえる。

今年の大会は、全国的に新型コロナが拡大した4月に中止が決まったが、来年に向けて力強い第一歩を踏



今年3月に完成した鳥取県の弓ヶ浜サイクリングコース。黄金週間の5月5日は貸し切り状態だった。前方左に大山が見える。

(撮影 川上奈々)

みだそうと代替企画が決定した。本来、40回目となる節目の大会を39.5回として開催。8月23日～9月6日にかけての毎週末、分散して競技をした。

米子ではここ数年、街の活性化に向けた動きが盛んだ。この勢いを止めてはいけない。感染対策を講じつつ、地方ならではの団結力で一步步踏み出したい。

(会員 川上奈々)

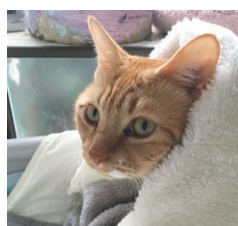
猫・新型コロナウイルス・人間

1997年、9歳だった初代同居猫が突如、激しい消化器症状で倒れました。動物病院では、治療どころか極度の貧血のため血液検査が不可能。約40時間後、私に見守られて息を引き取りました。この症状は当時、猫にときどきある謎の急死パターンの一つとされていました。しかしこの症状は、数年後、猫コロナウイルスにより引き起こされる致死性疾患「FIP（猫伝染性腹膜炎）」として、動物医療の現場や飼い主たちに広く知られるようになりました。

現在、FIPの治療薬は数種類ありますが、長期生存の可能性は30%以下。神経症状などの後遺症や治療後の再発症も多く見られ、人間の新型コロナと似ています。猫コロナウイルスはヒトには感染しませんが、FIPの治療薬の中には、人間の新型コロナの治療薬として期待されるものもあります。

ウイルスは、国境も動物種も関係なく、ただ好都合な宿主を求めているだけです。世界規模のパンデミックに立ち向かうヒントは、「ヒト」の枠を超えた取り組みにありそうです。動物医療や動物福祉には、全人類の生存の可能性が隠されているのかもしれない。

近視眼的に「私たち人間の役に立つかどうか」という基準で物事を測る愚かさを噛み締めながら、目の前の3匹の猫たちを愛する毎日です。(理事 三輪佳子)



我が家の猫は新型コロナウイルスに何を思うのか。
(撮影 三輪佳子)

日本の報道への違和感：英国と比較して

私は英国をはじめとする欧州と、日本の視点から新型コロナウイルスをめぐる報道を観察してきました。日本のメディアに覚えた違和感をお伝えすることで、皆さんにお考えいただくきっかけになれば、と思います。

英国では感染爆発の危機に対応するため3月半ばに外出・移動制限が課せられましたが、同時に公共放送(BBCおよび地上波テレビ全局)の放送内容を制限する指針が通達されました。人々の不安を不必要に煽らないように、報道番組を重視し、冷静な判断を促すように努めよというものです。

一方、日本のテレビ番組、特にワイドショーでは、人々の不安を煽るような情報が繰り返し流されています。神奈川県医師会が抗議したように、専門家でもない、いわゆるコメンテーターが、人命を左右する問題に意見する異常さを認識すべきではないでしょうか。

そして日本の極端なゼロリスク信仰です。

新規感染者数の警戒基準が、欧州では10万人当たり50人なのに対し、日本では0.5人と百倍も厳しい。現在は2.5人に緩和されているとはいえ、経済活動の自粛など、自ら首を絞めているように見えてなりません。さらにPCR検査陽性者を感染者として数え、その増減をことさら強調することも疑問です。

日本の報道に、もっと科学ジャーナリストの視点が取り入れられることを願ってやみません。

(会員 清水健＝ロンドン在住)



中華料理の円卓に透明な衝立。ビールを飲みながら歓談する日はいつ戻るのか。早稲田駅近くの中中華料理店で。(撮影 土屋礼子)

コロナの夏 写真は語る

政府が4月7日、緊急事態宣言を出し、マスクの着用と、密閉・密集・密接の3密を避ける暮らしが始まった。3密を懸念されたのが首都圏の電車だ。副編集長の倉又茂理事が撮影した、折々の車内風景の写真を紹介する。

緊急事態宣言下の5月5日午後4時すぎ。副都心線(東横線)中華街行き車内風景(写真①)を見ると、ガラガラでもマスクをしている。ゴールデンウィークは繁華街にも観光地にも人の姿は少なかった。

緊急事態宣言が解除された後の7月9日午後9時すぎ。地下鉄丸の内線(写真②)では、フェイスガードを付け、マスクをしてスマホを一心に見続ける男性がいた。まるで禅僧のようだ。そういえば、三密は元々、仏教用語だった。

仕事で遅くなっても、お酒を飲んだ後でも、マスクはしている。真面目なのか、同調圧力なのか。



①



②

(撮影 いずれも倉又茂)

新型コロナ、医療現場の最前線から 聖マリアンナ医科大学感染症学講座教授・國島広之さんに聞く

7月例会は新型コロナの収束の兆しが見えない中、会場に講師を招く従来の対面型に加えて、オンラインでも参加できる新しい形の例会を試みた。「医療現場の実態と『第2波』に備えた今後の課題—新型コロナウイルス感染症の臨床医として—」をテーマに27日、日比谷図書文化館スタジオプラスで開いた。

未曾有の世界的流行を引き起こした新型コロナウイルス。医療現場ではこの病気とどのように向き合いながら戦っていくのか。感染症対策・診療に従事する聖マリアンナ医科大学教授國島広之さんに話を聞いた。

診断と治療は病院の総力戦

國島さんが勤務する大学病院は、新型コロナ患者の中でも、人工呼吸器の装着を前提にした重症者受け入れ医療機関として位置付けられている。見せてくれた入院患者の肺画像は「感染症医を20数年やっているが、このような肺炎は見たことがない」と國島さんが言うほど炎症と思われる白い影の部分が大きい。

新型コロナウイルスは重症化すると肺以外からも検出される。呼吸器、腎臓、肝臓、心臓など。そのため、全身感染症になっている。内科、外科、耳鼻咽喉科などあらゆる診療科で診断や治療にあたらざるを得ない。医師、看護師、薬剤師などの総力戦で臨んでいる。

病院には約3000人の職員が働いている。「皆、感染するかもしれない不安や恐怖を常に抱えている」。國島さん自身も「夜中に急に目が覚めて、(コロナ

に感染して)熱が出ているんじゃないかと心配になり、体温計に手が伸びる」と率直な気持ちを明かした。

國島さんは病院の感染対策の責任者でもある。院内感染が起きないように予防策を講じてもクラスターが発生することがある。予防策にも限界があるという國島さん。「クラスターがメガクラスターにならないよう努力するしかない」



医療現場の厳しい状況を語る國島広之さん (撮影 都丸亜希子)

PCR検査結果がすべてではない

「医師は臨床経過とその背景で診断するので、初回のPCR検査の結果だけで診断はしない」と國島さん。新型コロナは潜伏期にはほぼ陰性のため、その時の陰性の結果だけでは判断できない。検査の数日後には陽性になることも考えられるという。

また、世の中には多くの発熱患者がいるが、そのすべてが新型コロナ患者というわけではない。國島さんは「発熱患者がPCR検査陰性だったので感染していなくてよかった」ではないと指摘。実際にはリウマチや結核などの発熱かもしれない。また、治療を急がなければ死に至る発熱かもしれないなど、正しく判断することの大切さを強調した。

しかし、陰性にならないければ先には進めない。社会は陰性を証明したがるという國島さん。「陰性を証明するのであれば、科学的には週2回はPCR検査を続けなければならない」としつつ、その労力と金額を考えれば現実的ではないと指摘した。

短い夏休み

國島さんは、7月に感染者数が減少した時期を「短い夏休み」と表現した。厳しい現状は変わらないが、今後承認されていく治療薬にも期待しながら次の波に向けての準備をしている。

「みんな恐怖と闘いながら死ぬほど頑張っているんです」と言う國島さんの言葉が強く心に響いた。

(理事 早野富美)



会場内の参加者はマスクを着用し、距離をとって着席。(撮影 都丸亜希子)

会員の青野由利さん 科学記者で初の日本記者クラブ賞受賞

会員の青野由利さん（毎日新聞専門編集委員）が本年度の日本記者クラブ賞を受賞した。科学記者では初めての快挙。「科学と社会との接点」を常に意識した姿勢と、毎日新聞の土曜日朝刊に2016年から連載しているコラム「土記」が評価された。受賞記念講演会が7月29日、オンラインで開かれた。要旨を紹介する。

青野さんからは「ジャーナリストになろうと思ってなかったわけではなく、寄り道、回り道を繰り返してきたので、え、私でいいんですか？ という気分ですが、科学記者の役割を知ってもらいきっかけになればなによりです」というメッセージが届いた。

青野由利さん受賞記念講演要旨

なぜ、科学記者になったのか。

最大の理由は実験が下手だったからです。

薬学部に進学したとき、漠然と研究者になろうと思っていました。しかし、見事につまずきました。研究者としてやっていけないのではないかと。こう思いまして、別の道に。

当時は雇用機会均等法がなく、日本の多くの製薬企業は女性を募集していませんでした。そういう中で、新聞社は受けられた、ということも理由の一つです。

毎日新聞に科学部、今の科学環境部ができたのは、1984年です。その時、私も配属になりました。当時は、部長1人、デスク1人、部員7人の合計9人でした。個人的には生命科学、生命倫理、天文学が好きですが、まんべんなく、あらゆる分野の記事を書きました。

スタートしたときはマイナーだった科学報道が徐々に重要視されるようになりました。きっかけはいくつかありますが、たとえば、地球温暖化ですね。1997年に京都議定書が締結され、注目されました。もう一つは2011年の東日本大震災と原発過酷事故です。

毎日新聞は今、科学環境部が17人、くらし医療部が20人ぐらい。合わせて40人弱の記者が科学、医学の報道に携わっています。隔世の感があります。

2000年代前半に論説室に配属になりました。論説室はさまざまな分野の専門記者がいます。メインストリームは政治、経済、外交なんです。毎日、会議

で社説を決めていくのですが、その中で、政治も経済も外交も、あらゆる分野の背景には科学がある。科学的な思考が必要なんだと感じました。なのに、科学的思考が軽視されていると感じるようにもなりました。

東日本大震災と原発事故でも、政治的、経済的判断が科学的、技術的判断に優先してきたから起きたと感じました。一方で、リスクについて科学記者として書いてはきたと思うのですが、安全対策を変えることはできなかった。それは科学記者にも責任がある、と痛感しました。科学記者は逃げられないと感じ、科学の視点から原発政策、エネルギー政策を書くように心がけてきました。



青野由利さん
(撮影 高橋勝視)

受賞理由に挙げてもらったコラム「土記」について。

「土記」は土曜日朝刊のコラム欄です。毎日新聞では、曜日ごとにコラムがあります。

今日は水曜日で、まだ、心に落ち着きがあるんですが、木曜日の夕方になると、どうしよう、何を書こうと、ソワソワしてきます。

書くときに、新しいデータ、新しい話を提供する、正確さと伝わりやすさのバランスを考える、というのは科学記事と同じですが、コラムを書く時の方が、エイヤーと書くことができ、書きやすいと思うことがあります。

新型コロナウイルスを書いていると思うのですが、科学が唯一の正解を持っているという誤解があります。科学は不確実な部分があり、なかなか、正解にはたどり着かないことがある。そういうことも書くことにしています。

今回の賞を励みに、これからも書いていきます。

青野由利（あおの・ゆり）さん略歴

毎日新聞社論説室専門編集委員。東京生まれ。東京大学薬学部卒、同大学院総合文化研究科修士課程修了。著書に『ゲノム編集の光と闇』（ちくま新書、第35回講談社科学出版賞受賞）、『宇宙はこう考えられている』『ニュートリノって何？』『生命科学の冒険』（以上、ちくまプリマー新書）、『インフルエンザは征圧できるのか』（新潮社、2010年科学ジャーナリスト賞受賞）、『ノーベル賞科学者のアタマの中』（築地書館）など。1988～1989年フルブライト客員研究員（MITナイト・サイエンス・ジャーナリズム・フェロー）、1999～2000年ロイター・フェロー（オックスフォード大学）。

コロナで増す科学報道の重要性 大隅 典子さん

ご縁があって本年より「科学ジャーナリスト賞」に関わることとなった。優れた科学報道や科学者による啓発的な著作、科学コミュニケーション活動等を表彰するこの賞は、2006年に設立され、選考委員会は科学ジャーナリストおよび科学者より成る。本賞の母体である日本科学技術ジャーナリスト会議の会員による一次選考を経た11作品（新聞2、映像3、書籍4、展示・WEB2作品）から大賞その他を選ぶ最終選考会議が行われたのは、さる6月7日。故米沢富美子先生の後任という大役が自分に務まるか、書面審査を提出し、ドキドキしながらオンラインで臨んだ。私以外の方々は広い会場にソーシャルディスタンスを取ってお座りになり、こちらはリモート参加でスクリーンに大写しになっていたのだと思う（恥ずかしや…）。COVID-19に振り回された（ていう）2020年を象徴する会議であった。



すでに書面審査の点数は集計されていたが、果たして、議論は侃々諤々（かんかんがくがく）。第1回の科学ジャーナリスト賞受賞者でもある元村有希子氏が、選考委員長として見事な采配で会議を取りまとめた結果、今回は「大賞」は該当作品無しとなり、新聞1件ならびに書籍2件が「科学ジャーナリスト賞」として選ばれ、ウェブ展示1件が「科学ジャーナリスト賞特別賞」の荣誉に輝いた。それぞれの作品については、他の審査員の講評を参照されたい。

筆者は神経科学分野の科学者として、「科学コミュニケーション」に少なからぬ興味を抱いている。国民の税金をもとにして研究活動を行った成果は、査読という戦いを経た上で、論文という形になって公表され

る。科学分野で論文は英語を共通言語とするため、日本の市民が論文をそのまま読むことには、専門性に加えて言語の壁が立ちはだかる。したがって、誰かが仲介役となって研究成果の意義や面白さ（あるいは問題点も）を伝える必要があり、健全な批判精神を伴う科学ジャーナリズムはきわめて重要な意味を持つ。

東日本大震災の後も科学者のコミュニケーション不足が批判されたが、今年のCOVID-19に関して言えば、医師や科学者が、こぞって未査読の原稿をbioRxivやmedRxiv等の「プレプリントサーバ」に公表し、それをもとに報道が前のめりに進む事態となっている。科学ジャーナリズムの重要性がいっそう問われる中、来年の科学ジャーナリスト賞にどのような作品が集まるか、とても期待している。（東北大学副学長）

「南海トラフ確率80%の内幕（7回連載）」

科学と政治の問題が露わに 村上 陽一郎さん

この作品には幾つの特徴がある。第一に、応募の形式の周到さ。問題意識の出発点、目的、取材方法、7回にわたる本記事、記事への専門家を含む反響、それらを、高齢者の多い（失礼、自分のことです）審査員のため、読み易い拡大コピーをしてファイル。見事だった。第二に、新聞記事としては、ただ一人の記者の責任によるキャンペーンであること。



内容は、南海トラフ地震の、30年内の発生確率80%、という地震調査委員会のやや唐突な発表の根拠を、執拗な情報開示請求と、それに基づく関係者一人一人への丹念な直接取材を通じて、キャンペーン報道

科学ジャーナリスト賞 2020 受賞者一覧

優秀賞	中日新聞編集局社会部記者 小沢慧一 「南海トラフ80%の内幕（2019/10/20～12/1、7回連載）」
	毎日新聞「幻の科学技術立国」取材班（代表 須田桃子） 書籍「誰が科学を殺すのか 科学技術立国「崩壊」の衝撃」
	読売新聞東京本社編集局科学部次長 三井誠 書籍「ルボ 人は科学が苦手 アメリカ「科学不信」の現場から」
特別賞	NPO法人「科学映像館を支える会」理事長 久米川正好 「科学映像館」の取り組み http://www.kagakueizo.org/

選考委員（50音順、敬称略）【外部委員】相澤益男、浅島誠、大隅典子、白川英樹、村上陽一郎
【JASTJ委員】大池淳一、佐々義子、滝順一、林勝彦、元村有希子

としたものである。開示された調査委員会の議事録は、幾つも大きな疑問点を含んだものだった。2018年の80%説が発表されるに当たって、それが、科学的根拠を欠き、防災予算を獲得するための方策に利用する目的だったこと、またその目的が、防災研究者サイドに重視された、という点を明らかにしたものである。ここにも科学と政治の関係の問題が露わになる。

(東京大学名誉教授、国際基督教大学名誉教授)

書籍「誰が科学を殺すのか 科学技術立国「崩壊」の衝撃」

平成時代の科学政策の迷走

浅島 誠さん

本書は連載記事「幻の科学技術立国」を大幅に加筆して一冊にまとめたものである。日本の科学技術の危機はここ30年指摘され続けている。その中で本書は科学技術と政治、大学、企業等との関係を現場に行き、丁寧に調べてその実態を浮き彫りにしている。



政府による「選択と集中」「出口指向の研究の重視」「効率化優先」等に見られる基礎的研究の軽視と短期的な成果主義を拡大してきた。また大学側も運営交付金の減少、任期制の採用などによる研究者雇用システムの変化、外部資金獲得の奔走など現状の日本の置かれた研究環境でいかに裾野が狭くなり疲弊し、研究者に余裕がなくなり学問や人材が育っていないことを明確にしている。

企業も含めて構造的な日本の科学技術の崩壊の中で問題点を挙げながら、それぞれの現場の関係者本人に直接インタビューしているところはユニークであり大変に良い。インタビューを受けた人の中には、本文とは異なる主張をする人もいて、問題の全体像を多角的に理解できる構成になっている。今後について海外の潮流、科学技術政策を政治イシューにしたいだけでなく、もう少し踏み込んで展望していれば更に響いただろう。(東京大学名誉教授、帝京大学特任教授)

書籍「ルポ 人は科学が苦手 アメリカ「科学不信」の現場から」

なぜ、人は科学が苦手なのか

相澤 益男さん

科学大国アメリカには、なぜか科学不信が根強い。「ルポ 人は科学が苦手 アメリカ「科学不信」の現場から」は、その真相に迫った秀逸な著作だ。



著者は、特派員としてワシントンに滞在中、地球温暖化は「でっちあげだ」と言って憚らないトランプ大統領の出現に触発され、アメリカ社会における科学の実態の解明に取り組み、丹念な取材を積み重ねるうちに、「人は科学が苦手」だと気付く。

この視点は斬新だ。そこから見えてきたのは、信仰に基づく進化論への反発と、規制を嫌う地球温暖化への疑問という、二大科学不信の本質である。さらに、信じたいものを支持するという政治心理が働くと、保守とリベラルの二極構造にもつながる。科学不信が、アメリカ社会の分断にもかかわっているとの指摘は、意表を突く。

「人は科学が苦手」という視点に立った、新しい「科学の伝え方」も示唆に富む。人は、それほど科学的に物事を判断しているわけではないので、科学と社会の溝を狭めるには、事実を訴えるだけでは決して十分ではない。エトス（信頼）とパトス（共感）の大切さを、肝に銘じておきたい。

(科学技術振興機構顧問、東京工業大学名誉教授・元学長)

「科学映像館」の取り組み

科学、文化に大きな意義

白川 英樹さん

当初は研究や教育、企業のPR用に撮影されたが、その後、人の目に触れないままに分散し忘れ去っていく映画用フィルムで撮影された科学映像作品を収集し、デジタル化して保存・公開することは、図書館と同様に科学面でも文化面でも極めて意義が大きい。



映画用フィルムは材質そのものに耐久性がなく、保存や放置・埋蔵される過程で次第に劣化する。劣化して見るに堪えなくなる前にデジタル化して公開するのが望ましい。そのためには多くの人の手と費用がかかるが、久米川氏はあえてこの困難な仕事に挑んだ。

NPO法人「科学映像館を支える会」を設立して、埋もれていた多数の科学映像作品を発掘し、関係者の承諾を得て修復し分類した。それをウェブ展示「科学映像館」において無料で公開している努力は、科学ジャーナリスト賞に値すると高く評価する。「科学映像館」では2020年8月の時点で1100を超える数の科学映像作品を収集・配信しており、視聴再生回数2400万回に及んでいる。

科学ジャーナリスト賞は年度毎に優秀作品を顕彰してきた。このような、年度を超えて継続的に取り組んでいる努力に対して「特別賞」として表彰した。

(筑波大学名誉教授、ノーベル化学賞受賞者)

第19期科学ジャーナリスト塾 初の完全オンライン形式で開講

9月3日、第19期の科学ジャーナリスト塾が開講した。今期は新型コロナウイルスの感染予防のため、塾史上初めての完全オンライン形式での開催。32名を迎えての船出となった。北海道から沖縄までの全国各地からの参加に加えて1名がスイスからの参加で、25名が社会人、7名が学生というオンラインならではの構成。職業も映画監督、広報部員、フリーランス、科学館員、高専教師、研究所員、弁理士、薬剤師、国連職員など多彩な顔ぶれが集まった。(スケジュールは下表に)

初日のガイダンスでは、室山哲也会長、内城喜貴塾長のあいさつに続き、スタッフの自己紹介、スケジュール説明や技術的なガイダンスを行い、塾生ひとりひとりが自己紹介と参加動機を披露した。



内城喜貴塾長は「ZOOMでもこんな塾ができるんだね、となるように一生懸命やりますので、みなさんも一生懸命やってください」とZOOM越しに塾生に語りかけた。

とりが自己紹介と参加動機を披露した。

社会人からは「広報や科学館でのプレゼンテーション技術を向上させたい」「地域貢献として生物情報を発信する本を書きたい」「退職後は経験を生かして科学ライターになりたい



塾生とスタッフ、講師や理事の一部が集まった。一画面には収まりきらず、二画面展開となった。(撮影 いずれも著者)

い」「自分の主張をうまく伝えられるプレゼンをしたい」といったものから「社内で役員などに技術情報をわかりやすく伝える必要があるため」「セミナーやウェブでの情報発信で本質をわかりやすく伝える力を養いたい」「異分野をまたぐ産業界からの政策提言書を作成するにあたり、用語や表現の統一に苦労した」といった業務のなかでの課題を解決したいという動機も見られた。

学生からは「自分の研究分野を魅力的に広く伝えられる研究者になりたい」といった声などがあつた。

これに対して運営側のメンバーからは「とにかく楽しんで欲しい」「待っているのはダメ。積極的に関わって」「塾が終わったら、自己実現に一步近づいたと実感できるように」という激励の言葉が口々に語られた。

(副会長 瀧澤美奈子)

第19期科学ジャーナリスト塾 スケジュール

9月3日(木) 19:00~21:00	
1	塾の開講 ガイダンス
	内城喜貴、瀧澤美奈子、柏野裕美
9月17日(木) 19:00~21:00	
2	講義1「テーマの立て方」
	軍司達男(内城喜貴、室山哲也)
10月1日(木) 19:00~21:00	
3	講義2「塾生：作品発表①」(作品提出+アドバイス)
	内城喜貴、瀧澤美奈子
10月15日(木) 19:00~21:00	
4	講義3「文章の書き方、伝え方+一部作品アドバイス」
	高橋真理子、内城喜貴
11月5日(木) 19:00~21:00	
5	講義4「映像のつくり方、伝え方」
	小林隆司、室山哲也

11月19日(木) 19:00~21:00	
6	講義5「本の作り方」
	倉田卓史、瀧澤美奈子
12月3日(木) 19:00~21:00	
7	講義6「Webジャーナリズム+フリーランスの心得」
	亀松太郎
1月14日(木) 19:00~21:00	
8	作品発表(文章)と指導(1) 作品へのコメント
	高橋真理子、内城喜貴ほか
1月28日(木) 19:00~21:00	
9	作品発表(プレゼン)と指導(2)
	室山哲也、瀧澤美奈子ほか
2月4日(木) 19:00~21:00	
10	修了式+大質問大会
	講師全員+JASTJ理事+塾OB

第4回サイエンス・ブック・カフェ 「科学技術で読む米中対立」をテーマに

「中国、科学技術覇権への野望～宇宙・原発・ファ－ウェイ」を先ごろ中央公論新社から出版されたJASTJ会員の倉澤治雄さんを講師に招き、7月18日に今年度初めてのサイエンス・ブック・カフェを開いた。科学技術の世界でも台頭目ざましい中国について「フラットに話したい」と倉澤さんはたくさんのデータに基づき現状を分析、参加した会員からの質問に答えた。

倉澤さんはフランス国立ボルドー大学で博士号（物理化学専攻）を取得後、日本テレビに入社、北京支局長、政治部長などを務められた。退職後も科学技術振興機構中国総合研究センターフェローとして中国の科学技術について研究してきた。とりわけ中国の民間通信機器メーカー、ファ－ウェイに関しては繰り返し直接取材した経験を持つ数少ない日本の科学ジャーナリストだ。

講演のタイトルは「科学技術で読む米中対立の深淵～中国の科学技術力は米国に追いつくか」。倉澤さんは米国と拮抗するまでに成長した中国の科学技術予算、研究者、論文数などのデータを示すとともに、国家規模での情報通信技術（IT）活用によって市民が政府によって日常的に監視される社会となりつつある

ことに懸念を示した。

また米中対立がグローバル・サプライチェーンの分断をもたらし、輸出管理の強化や知的財産の囲い込みを促す現実を指摘。「科学技術は誰のものか、科学技術が文明の分断と破壊をもたらすことがないのか」と問いかけた。

質疑応答では、中国に比べて低迷ぶりの目立つ日本の科学技術力について参加者から危機感が提起され、なぜ日本の科学技術力が力を失ったのか、復活の道はあるのかなど議論があった。

今回のカフェは日本記者クラブの会議室で開いたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため会場への参加人数を制限しウェブ経由（ZOOMを利用）での参加も受け付けた。参加者は事務局も含め会場が7人、ウェブを介しての参加が8人だった。リアルとバーチャルのハイブリッドであったが、比較的少人数だったせいか質疑応答なども円滑に実施できた。

（副会長 滝順一）



データに基づいて中国の現状を語る倉澤治雄さん（中央）（撮影 都丸亜希子）

会員有志の知的好奇心を刺激 オンラインZOOM井戸端会議ほか

新型コロナ感染拡大の中、オンラインでしかできない新しい試みを、と始めたのがZOOM井戸端会議だ。会員が「ご近所さん」として専門分野の話題を提供し、参加者全員が約5人ずつのグループに分かれて意見交換をする。最後に全員でディスカッション。7月13日は「新型コロナ取材で感じたこと、感じること」、8月16日は「日本の科学技術の行方」を開催。9月19日は中秋の名月直前企画として「アガタさんに聞いてみ

よう！月の魔力、月の魅力」のテーマで、実施した。毎回、20～30名の会員が参加し、刺激的な体験を共有している。

●自己紹介動画で会員同士の交流を図る

会員同士の交流を図る取り組みの一つとして、YouTubeに会員の自己紹介動画を公開している。URLを知る人しか視聴できない限定公開という設定にし、2～3人分の新着動画を追加するごとに会員にはメールで知らせている。8月末時点で、28人分が登録終了。関心ある会員は誰でも参加できる。事務局宛に連絡を。

（副会長 柏野裕美）

柴田鉄治さん逝去

JASTJの顧問で元朝日新聞論説委員の柴田鉄治さんが、8月23日、腎不全のため亡くなりました。85歳でした。

柴田さんはJASTJの草創期を支えた主要メンバーの一人で、科学ジャーナリスト賞や科学ジャーナリスト塾などの活動をとおり、科学技術報道を目指す若き人材の育成に



柴田鉄治さん（撮影 柏野裕美）

力を尽くされました。

戦後の原子力開発や原発事故の報道の経験をふまえ、「科学ジャーナリズムの使命とは何か」を最後まで厳しく問い続けていました。

次号の会報（97号）では柴田さんの追悼特集を予定しています。またJASTJのホームページでも塾のサイトなどで、講義の姿や塾生とのやりとりなど、在りし日のご活躍の様子を伝えたいと思います。柴田さん、安らかに眠りください。心よりご冥福を申し上げます。

（副会長 瀧澤美奈子）

私の感染症対策奮闘記

歯科診療所を開業して26年目を迎える。振り返れば、院内感染対策に苦心する日々であった。歯科治療は唾液、血液などに触れる機会が多い。感染対策は接触感染と経気道感染に分けて考え、手間は結構かかる。

診療所の歴史で警戒した感染症は、いずれも経気道感染であった。今年の新型コロナで3度目になる。過去には2009年に猛威を振るった新型インフルエンザ。1999年には結核が再興感染症として流行した。医療施設で感染が広まった疑いが強く、医療者の意識の低さが指摘された。この結核が私の感染対策の転換点となった。

当時テナントで開業していた私の施設では、結核のような飛沫核感染に対応できなかった。飛沫粒子が室内の空間に漂い、空気の流れに乗るため、対策は診療室内の換気が決め手になる。だが、実状は開閉式の窓が足りず、通気性が悪かった。窓の増設を望んでも、壁を壊すことになり、建物の強度に影響がでる。当然、家主から工事の許可は得られなかった。そこで診療所の建築を決断した。

購入した土地は手狭であったが、設計の段階で感

染対策を盛り込むことができた。窓や換気扇の配置、患者の口から排出するエアロゾルを吸引して室外に排出する装置を設置した。おかげで空気感染のストレスは軽減し、今に至っている。その一方、この出費が原因で経営を立て直すまで数年を要してしまった。

医療施設の感染対策を設備投資とは言わない。収益が期待できないからだ。保険診療では全国共通の医療費が設定されている。一般の商いと違い、経費の上乗せは許されない。

4年前の保険診療報酬改定では感染対策を講じた施設に報酬が配分されたが、その額は患者一人を診て30円だった。感染対策に取り組む国の姿勢が見えよう。

国策として感染症の対策を練らないと現場が困る。戦略もなく医療施設へ託すのは無理がある。今回のコロナ禍で感染対策をした医療施設が軒並み赤字を抱えてしまった。収益を目的とせず、医療として必要だと確信し、行動した結果だ。赤字になった施設の医療者には深く共感を覚える。

(理事 西野博喜)

WEB編集長から

いつもJASTJホームページをご覧いただきありがとうございます。以下6月以降にウェブにアップしてきた記事です。ご覧ください。

■ 7月例会(7月27日) 案内

医療現場の実態と「第2波」に備えた今後の課題 ―新型コロナウイルス感染症の臨床医として―について案内しました。

感染制御学の専門家である國島広之さんは、医療現場の最前線で新型コロナウイルス感染症の診療にあたってきました。多くの患者と向き合ってきた1人の医師としてもチームとしても、日々刻々と感染状況が変化し、現場がひっ迫する中で、厳しい対応を迫られてきました。國島さんから臨場感・緊張感あふれるお話、そして次の流行を見据えたお話をお聞きし、医療現場の今後の課題を整理しました。

■ 第19期 科学ジャーナリスト塾 塾生募集

【オンライン開催】コミュニケーションの極意を学ぼう!! ~プロのジャーナリストが文章やプレゼンを指南~の募集を締め切りました。

科学ジャーナリスト塾では、プロのジャーナリストやプロデューサーや編集者を講師として招き、「企画の立て方」「取材の仕方やまとめ方」「文章やプレゼンの仕方」などを総合的に学びながら、オンライン取材も行い、コミュニケーション

力を身につけていただきます。学習の集大成として「作品(記事かPPTプレゼン)」づくりにも挑戦し、最終的に発表していただきます。

おかげさまで定員に達しましたので、募集を締め切らせていただきました。

■ 科学ジャーナリスト賞2021推薦作品の募集開始

「科学ジャーナリスト賞2021」の推薦作品の募集を開始しました。科学ジャーナリスト賞は、科学技術に関する報道や出版、映像などで優れた成果をあげた人を表彰するものです。

募集要項、科学ジャーナリスト賞候補推薦書などの詳細は、「科学ジャーナリスト賞」のページをご覧ください。

■ 9月例会(9月11日) 案内

コロナショックで加速する製造業の新たな産業革命 ―私たちの未来社会Society5.0への胎動―について案内しました。

世界の専門家会議に多数参加する三菱電機主席技監の安井公治さんは、戦略的に新産業革命が起こせると見えています。日本のものづくりが強みを発揮するには何が必要なのか。スマート製造は日本経済再生の立役者となりうるのか。さらにはスマート化がもたらす新たな社会構造の展望も含め、文科省のCOIや内閣府のSIPでの取り組み状況とともに今後の展望についてお話を伺いました。(WEB編集長 湯浅誠)

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2020年9月現在)

 AE 海老名・綾瀬法律事務所 科学技術に強い法律事務所です。 弁護士 中道 徹 (神奈川県弁護士会) AE 海老名・綾瀬法律事務所	 株式会社東芝
 ELSEVIER エルゼビア・ジャパン株式会社	 公益社団法人 日本アイソトープ協会 Japan Radioisotope Association 公益社団法人 日本アイソトープ協会
 花王株式会社	 株式会社 日本医工研究所 Japan Medical Engineering Institute 株式会社日本医工研究所
 国立研究開発法人 科学技術振興機構 Japan Science and Technology Agency 国立研究開発法人 科学技術振興機構	 JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE 日本学術振興会 日本学術振興会
CACTUS カクタス・コミュニケーションズ株式会社	 MAMEZOU HOLDINGS 株式会社豆蔵ホールディングス
 構造計画研究所 KOZO KEIKAKU ENGINEERING Inc. 株式会社構造計画研究所	 国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構
 一般財団法人 新技術振興渡辺記念会	 ロート製薬株式会社
 東京理科大学 Tokyo University of Science 東京理科大学	賛助会員募集中

■ 新入会員の自己紹介

● 川上 奈々 (合同会社オフィス・キャナル)

島根大学、米子高専での勤務(事務職)を経て、鳥取大学医学部で広報業務を担当。その際、「広報」の重要性を感じ、医療系ベンチャー企業の広報へと転職。その後、民間企業の勤務を経て、2020年7月、鳥取で「広報」によって地域を活性化させたいという思いで広報業務を代行する会社を起業。この会で、さらなるスキルアップをはかりたい。

● 山口 健 (三井住友DSアセットマネジメント株式会社)

長年、資産運用業界で従事しております。投資という観点から日本を見ると、膨大な科学技術の蓄積があるにも関わらず、その財産を有効に活用できていないとても「もったいない国」として映ります。当会への参加を通じてその背景や理由などが理解できればと考えております。

退会

倉本昌昭、守信人(ご逝去)、田中慶一、高嶋秀行、サントリーホールディングス株式会社

■ お知らせ

● JASTJ会員向けメーリングリスト(ML)は2種類あります。

① info-jastj@jastj.jp

全会員を対象としたML。件名欄に「JASTJからのお知らせ」が入る。月例会の案内など、すべての会員に呼びかけるもので、JASTJ事務局のみが発信できる。

② kaiin-jastj@jastj.jp

受信希望をする会員を対象としたML。会員が携わるイベントの告知など、おもに情報共有のために受信を希望する会員に呼びかけるもので、kaiin-jastj@jastj.jp のアドレス宛で発信できる。

※ ※ ※

(注) メールアドレスを変更した会員は、これらのMLを受信することができません。かならずメールアドレス変更を事務局に連絡ください。また、info-jastj@jastj.jp や受信希望しているkaiin-jastj@jastj.jp のメールがしばらく届いていない会員も、事務局(hello@jastj.jp)まで連絡してください。

● 「会員だより」の原稿募集

会報ではほぼ毎月、会員の皆様から寄せられた近況などを紹介する「会員だより」を掲載しています。最近、面白いことを始めた、他の会員も関心を持ちそうな団体に加わった、会合に出た、といった話題を書いてください。テーマに関連した写真や、もし、あれば図表も付けてく

会員の BOOKS

新刊紹介

「海洋プラスチック 永遠のごみの行方」

保坂直紀著 (KADOKAWA・900円+税・2020年6月)

2020年7月からレジ袋の有料配布が義務化された。プラスチックごみに対する市民の関心が高まるのはよいのだが、「レジ袋なんてプラスチック全体の数%にすぎないから無意味」「なぜペットボトルでなくてレジ袋なんだ」などという声もまじってかまびすしい。きっとそうなるだろうと思って書いたのがこの本だ。脱プラスチックをあおることも、あきらめもしない。この問題にまつわるモヤモヤ感の原因を市民目線で調べる。個人の思いは(あまり)主張しない。大切なのは、まずわたしたちの立ち位置を確認すること、という方針で書いたら、案の定、「どっちつかず」「参考にならない」との評もいただいた。まずは事実関係を社会で共有して…という行き方は、やはりこの国では難しいのだろうか。(会員 保坂直紀)



ださい。写真が1枚なら原稿は1500字前後、2枚なら1300字前後となります。写真を見せたい、という場合は写真グラフを中心にもできます。

JASTJのHPで会報を選んでもらえば、バックナンバーを読むことができます。例えば、94号には高山由香さんが「“ラヂオ” 始めました」のタイトルで、鎌倉FMで理系雑学バラエティーの番組「理系の森」を放送している、という話を書いてくれています。また、92号では村上美由紀さんが「科学ジャーナリスト塾で学んだこと」を書いています。

会員だよりを書き出す前にまず、「書くよ」と連絡をください。アドレスは inoueyoshi55@gmail.com です。

編集後記

▶最近、あまり聞かなくなった言葉にROMがあります。本来は、リード・オンリー・メモリ(読み出し専用メモリ)のことですが、リード・オンリー・メンバー(読むだけのメンバー)という和製英語もあります。この会報は、多くの会員に寄稿してもらいたいと考えています。つまり、自由に読み書きができるRAM(ランダム・アクセス・メモリ)のような存在に。偶然ですが、最初の試みになったのが、2~3ページの特集です。急な原稿募集でしたが、5人の方から寄稿していただきました。写真も公募し、20枚近い写真が集まりました。多くの会員によって、新型コロナウイルスのさまざまな側面を記録する会報ができました。ありがとうございました。

▶高木勲生・前編集長の後任で、今号から編集長になりました。これからも前編集長時代と同じように、できれば前編集長時代以上に、積極的な寄稿をお願いします。(能)

編集・発行

 日本科学技術ジャーナリスト会議
Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1
日本プレスセンタービル8階848
Email: hello@jastj.jp

会長 室山哲也/事務局長 山本威一郎
編集長 井上能行/副編集長 柏野裕美、倉又茂

ホームページ <https://jastj.jp>